

子守唄にみるかわいさから母性を考える

荒川志津代

はじめに

子守唄というのはいうまでもなく、子供を守るときにうたう唄である。だから、子供と接する機会のある人ならば誰でも唄う可能性があり、ことばやメロディーを作る可能性がある。おじいさん、おばあさん、おとうさん、おかあさん、兄弟姉妹、おじさん、おばさん、等々、あらゆる人の唄である。

そしてまた、子守娘の唄でもある。「一般に子どもの守は母親がすることになってきたが、子どもを背負ったままでは激しい労働はできないから、そんな場合は老婆か、年長の子どもの仕事になっていた。農村では、年長の、特に女の子が、家事の手伝い

をし、また幼児の守をするのがふつうであった」ところが近世中期以後になると、農村では、口べらしのために、女の子は、七八歳になると、町へ子守奉公に出されるようになった。そして明治、大正になると、子守娘たちは、一人前の働き手とみなされる。十三から十六、七になると、子守をやめて、女工哀史で知られる機織りなどの他の職種に転職することが多かった。女工哀史ほどには知られていない子守の労働のきつさは、「この子泣くので日に日に痩せる。帯の二重が三重まわる。帯の二重が三重まわらいじゃ。締めて見やんせ四重まわる。」「いやいやよ子守をやめて早く嫁御といわれたい。」「こんな子守をさらりとやめて当世はやりの機業場」というように、子守唄の中でうたわれている。

子守唄には、このような、子守娘の立場にたつて、その心情をうたった唄が、比較的多い。それゆえ通常、子守唄の分類には、1 寝させ唄 2 遊ばせ唄 の他に、3 目ざめ唄 という項目が入っている²⁾。これは仲井によれば、「子守女が、その境遇のつらさを嘆いたり、愚痴ったりする内容のひとつとまり」であり、「子守」という労働に伴う唄でも」ある。

このように、老若男女さまざまの人が、いろいろな思いでうたったと思われる子守唄には、子どもに対する、それぞれの人の思いがふれられている。そのようないろいろな人の思いの中から、特に、子守娘と、子の実母という立場に置かれた女たちの、子どものかわいさに対する思いをとりあげ、その置かれた状況と「かわいさ」という感情の表出のされ方との関係をみていきたい。そして、実母という女が子に対していただく「かわいい」という感情に、容易にはられる「母性」というレッテルについて、「かわいい」という感情の表出を規定してくるものとの関係で、「母性」の実体は何であり、それが女たちにどのような作用を及ぼしているのか、をも考えていこうとするのがこの小文の目的である。

I 問題提起

「かわいさ限りなし」は だれの唄か

坊やはよい子だ ねんねしな

この子の可愛さ 限りない

山での木の数 芽の数

天へ昇って星の数

沼津へくだれば千本松

千本松原 小松原

松葉の数より まだ可愛い

子守唄の中で子どもへの表現として一番多いのは、「よい子」である。例の「坊やはよい子だ ねんねしな」というもので、これは通称、江戸子守唄と言われている。中央から地方へという文化の流れの中で、各地に流布していったものと思われる。この「よい子」に次いで子守唄にうたわれるのが、「かわいい」である。「よい子」と唄う子守唄と「かわいい」と唄う子守唄の最も大きな違いは、よい子の唄の原形が、ほとんど江戸子守唄一つであるのに、かわいいとうたっている唄は、何が可愛いのか、どのよ

うに「可愛いのか」ということを、いろいろたいこんで、さまざまの「かわい」唄ができてゐることである。それだけ、「かわい」という感情は「よい子」というより、こまやかなものを含んでゐるのであろうし、また、簡単には割り切れない複雑な感情なのでもあろう。

このような「可愛さ」をうたった一群の子守唄の中で、とりわけひきあいに出されるのが、この「限りなし」ものである。この唄に対する一般の見解というものをみてみたい。

白田甚五郎が彼の著³の中で北原白秋のこの唄への一文を紹介しているので、まず、それを引用してみる。「何といふ細かな愛に満ちた謡か。…略…しんみりとしてお母さんの息つかひまでが動いてゐるやうに思へます。…略…『和子様いとしにかぎりない』と歌つても、和様はやっぱりお乳をあげるだけの主人の御子ですから、ほんたうのお母さまとはちがひます。」そして白田自身も、「あふれんばかりの母の愛をうたった…」「千本松原小松原といふのが、いかにも母親の無限不尽な愛情を描いているやうである」と記している。また、吾郷・真鍋も、「あふれるばかりの母親の愛情が…」と言つており、最近の本の中で金田一春彦も、「美しい子守唄」という節の中でこの唄にふれ、「限りなく細やかな母親の愛情を表現して完璧の出来栄である」としている。

このように、通常この唄は、母親の愛情を表わしていると言われているが何故であろうか。白秋の言によれば、「お乳をあげるだけの」女と、「ほんたうのお母さま」である女の間には、子どもへの思いのちがいでともいうようなものがあつて、「ほんたうのお母さま」は「細かな愛に満ち」ており、「お乳をあげるだけの」女は、「ちが」うということになる。そしてこの唄は、細かな愛に満ちているから、「ほんたうのお母さま」の愛情を表わしているのだという論法である。ここに一つ、「ほんたうのお母さま」とそうでない女との間に、世話をしてゐる子に対する思いの中に、それほど普遍的な違いがあるのかどうかという問題が生じる。そのためここでは、このような限りない可愛さ、あふれんばかりの愛の表現、それらをうまく盛りあげる情緒、このような要素をかね備えた唄を作り出しえる人はどんな人であるのかを考えてみたい。

口承伝承の作者を考えても仕方ないことかもしれない。子守唄は子守をする人たちの集団の中で、集団の力によって生み出されたものであろう。しかし、この限りなしのような詩は、生活の労苦の中に心身ともに埋没せざるをえない人間の中から生まれなうたである。いったん形が出来てしまえば、万人にうたわれる可能性もあろうが、創作の過程に介在した人たちというの

は、ある種の空想やロマンを持つことのできた人たち、現実の生々しい生活から解き放たれた自由な発想のできる瞬間を持つことのできた人たちである。別の言葉で言えば、詩的感覚に鋭かった人たちと言ってもいいし、一種のぜいたくな時間をなんらかの意味で確保できた人といってもいい。だから、この唄の作者達は、山上憶良的な、小林一茶的な、心優しい男たちであるかもしれないし、また当然、女であるかもしれない。その女は、母親であるか、子守であるか、あるいは子の姉やおばであるか、さまざまな可能性が考えられるが、ただ一つ言えることは、この女たちは、現実の生々しい生活において、「千本松原小松原」というような言葉のもつ、美しさ、唄のかもしれない美しい情緒を好んだ女である。

この唄の作者達にこだわってきた。それは何故かと言えば、少なくとも作者は自分の思いをいくぶんなりともこめていると考えるからである。つまり、この唄に表現されている愛情はだれの愛情であるか、ということを考える手がかりになるからである。そして、これまでの考察から、このような詩をうたいだしえる心情を持つには、必ずしも、女性である必要もなく、また、「ほんたうのお母さま」である必要もないことを見てきた。ということ、は、この唄に表わされている愛情を、「ほんたうのお母さま」に

結びつける必然性はないということである。しかし、作ったのは男であるかもしれないが、表現しているのは「本当のお母さま」の心情だというような論もなりたちうる。しかし、心情というようなものが、コピーのように模写できるものであろうか。もし作者達が、「本当のお母さま」の心情を表現しようとしたとしても、その時作品に表われた心情は、「本当のお母さま」の心情とは違っているのではないだろうか。そして、私達の文化は、このように違ってしまった心情を「本当のお母さま」に結びつけてしまっているゆえに、女たちは、自分たちの生の感情とは別のところで、心情の持ち方を規定されてしまっているのではないだろうか。「本当のお母さま」は子どもに対して、このような心情をもたねばならないと、本当のお母さまもその他の女たちも、そして男たちが、思わされていると思えるのである。

この唄には、心優しい男の想いも、女の想いも、あらゆる人が、ある瞬間、子どもに対して持ちえる、万人の共通の感情がうたわれている。創作の過程に関与したが、特定の感受性を持った者たちだったとしても、そこにうたわれる感情はだれでも持ちえる瞬間があるから、うたは広まるのである。だからこそ、静岡県沼津地方のこの唄が、さまざまなヴァリエーションを持って、各地にうたいつがれてきたのであろう。

さてここで、私たちの文化を問題にしないわけにはいかない。

ちょっと考えてみれば、いや、ちょっと考えてみなくても、この唄と母親を結びつける必然性はないのである。そうであるのに、「あふれんばかりの母親の愛情が……」と言われると、齒が浮いたようなことを言っていると思いつつ、なるほどと思わされてしまうのである。そうして逆に、母親のイメージというものを、押し付けられもするのである。だれでも、この唄のような思いを持つことがあるということをしっかりおさえて、「母親」という言葉にまでわされないで、母性というものを考えていきたい。

II かわいさ表出のメカニズム

1 子守唄にみえる、かわいさ、にくさ

『日本伝承童謡集成』⁶は、北原白秋編による採集の偏り、つまり、多かれ少なかれ、「赤い鳥」運動の影響を受けているという難はあるが、それでも、現存する子守唄の採集書としては最もすぐれたものである。この書は、収録した子守唄総数約三五〇〇であるが、その中に、「子どもを」「よい子」とか「かわいい」と唄っているものが約三〇〇、「にくい」とかいじめるぞと唄っている

ものが約六〇ある。この三〇〇と六〇という数の差は、北原白秋編という童心主義の影響を差し引いても、わたしたちが一般に子どもに対してもつ感情を示していると考えてさしつかえない。つまり、子どもは一般に、「よい」「かわいい」存在であり、時々「にくい」存在でもありうるということである。さて、この子守唄の中では、「かわいい」「にくい」というのは、どのように唄われているだろうか。『日本伝承童謡集成』から分析してみる。

1-① かわいい

かわいいとうたわれている子守唄の中で、数の上で一番多く出現しているのは、「可愛いこの子」というように、いわば、子どものまぐらことは的に用いられているものである。なぜ「かわいい」のかというような脈絡なしに、子どもに属性として付与されたことばである。「子ども」「かわいい」という、子どもの属性を示すものとして用いられている。

次に多く現われるのが、「寝る子は可愛い」という言い方である。これは明らかに、「起きてほえる子は面憎い」というような唄のうらがえしであり、寝てくれという思いと、寝てくれたときの子どもに対していただくしみじみとした感情である。どんなにいたずらをして「にくい」と思った子どもでも、寝てくれると、そ

の寝顔がたまらなく可愛く感じられたり、また、子守という労苦から解放されたゆとりが、かわいいという感情を呼びおこしたりするものである。

それから、「かわいい」という用法のひとつとまりに、Iであげた「限りなし」ものがある。Iで述べたように、この唄からは、子どもというのはだれにとっても、「限りなく」可愛く思える時のある存在であることがわかる。

そして、ほっぺや目など、特定の容姿を可愛いとうたった唄がある。Ehrl-Eibesfeldt は *child care* の *releaser* としての特定の容姿について言及しているが、かわいさを感じる生物学的刺激要因とみなされるものが、子守唄の中にもみられることは注目に値する。

そして最後に、「かわいい」という言葉は在っても、その子守唄全体としてみれば、必ずしも、子どもをかわいいと思っているわけではない唄がある。これは主に子守の立場から、子守という労働のつらさにとりもなう感情を、子どもにからめてうたったものである。つまり、自分の子どもが可愛いなら守も大事にしる、というように、自己主張の中に子がひきあいに出されたり、なんで可愛がる人の子が、というように、子供への思い自体は非常にげやりになっている唄である。これらの唄にあらわれている、い

わば子どもに対する否定的な感情は、後に述べる「にくい」という唄との関連で考察したい。

なお、少数ではあるが、子守奉公のつらさに対して、子がかわいいので守奉公ががまんできる、とうたっている唄があった。守奉公のつらさに対しては、子どもなんか可愛くないと思ったり、子どもがかわいいから……、と思ったり、子守の心は揺れ動いたようである。

1—② にくい

次に、にくいとうたっている子守唄をみってみる。

「にくい」ということはほとんどが、「起きて泣く子は面にくい」という脈絡の中で用いられている。これは、1—①でみた「寝る子はかわいい」に対応するものであり、起きて泣く子というのが、子を守る者にとっていかに難儀であったかを思わせる。

次に、泣く子とは別の脈絡で、同じようにつらのにくきをうたったものがある。「なんぼよい衆の嬢やんかとして 人を見下げる面憎い」というように、泣かない子でも、面ににくいことがあったようである。

その他には、「寝ねえのか、この餓鬼め」という言い方で、「に

くき」を表わしたのが、二つあった。また、単に「憎いあの子」といういい方をしている唄が一つ、「にくい」ということはでなく「きらい」となって、「起きて泣く子はきらい」とうたっているのが二つあった。

なお、「にくい」ということははないが、雇主へのうらみをその子に向けて、子をいじめる唄が、「にくい」という唄とは別に約二〇あった。「この子泣いたら俵に入れて 土佐の清水へおくります 土佐の清水は海より深い 底は油で煮え殺す」「転べころべ 石場へ転べ 石で膝ぶって死ねばよい さぞや親父が泣くだろう」「子守ひどくすりゃ お内儀さんの御損 内儀さんの可愛い子を ひどくする」「兄さよくきけ 姉さも聞きゃれ 子守いじめりゃ 子をつねる」というように、いじめる原因は、子が泣くということと、子の身内のものの子守りに対する処遇へのいわば復讐心である。このような子へのいじめは、憎いとうたっている唄にも多くみられ、たとえば、「面が憎いから 田圃に蹴込み上るとばかりまた蹴込みよよい」となっている。

2 「かわいい」が表出する時

2—① にくい

子守唄にみえる子どもへの感情としては、「にくい」よりも「かわいい」の方が圧倒的に多いことは前に述べた。また、I問題提起のところでもみてきたように、子どもに対しては誰でも、あの叙情的な思いの中の「かわいさ」を感じうる可能性のあることを述べた。このことから、子どもというのは、万人に対して、「かわいい」という感情をおこさせる可能性をもつ存在と考えてよいだろう。つまり、私たちは、あの、小さな、弱い、生き物を、たいていは「かわいい」と感じるのだ。ところが実際には、子どもが駄々をこねた時などに、かわいいなどとはとても思えない瞬間を持つことは、私たちの生活の中にも見られることだし、また、これまで見てきたように、子守唄の中にもそのような感情はみられる。いったい、どのような状況のもので、かわいく感じられる、どのような状況ではかわいく感じられないのであろうか。

その点で第一に注目できることは、「にくい」という唄のほとんどが、「起きて泣く子」に対してであることである。また、子をいじめている唄にもこの傾向がみられ、「泣く子」は「煮え殺」されてしまうのである。泣き声、ことに子どもの泣き声は、決定的に不快感情をひきおこすことはいなめないが、「にくい」という感情はその不快さだけから引きおこされるのではない。子守唄に、「こんな泣く子を一日負うたら 足が棒になる杖になる」「寝たい

眠たいねさしておくれ 限りの夜業を終わさずに” “この子ようなく 人目にわるい たたくひねると思われる おもわれる”とあるように、おんぶというのが、幼い子守娘にとってはかなりきつい労働であったこと、おんぶすることによって空いた両手で、おしめの洗濯など新たな仕事をせねばならなかったこと、子を泣かすと、雇い主からかなりきつく叱られたこと、という要因を見のがすことはできない。つまり、自分に対して無害な存在に対してすらいだく「にくさ」というのは、その対象が在ることによって、主体に対する抑圧的状况が構築されていく時、主体が、その対象に対していただく感情である。そして往往にして、この目の前に在る対象は、抑圧的状况を作っている真の物ではない場合が多い。

子守娘の場合、目の前にあって自分を抑圧してくるものは、小さく無力な赤ん坊であるが、これが子守に対する真の抑圧者でないことは明らかである。しかし子守娘は赤ん坊に対して、たとえ瞬時であるにせよ、にくしみを感じてしまう。そしてこのにくしみは、具体的行動のレベルでは、いじめとなつてあらわれる。いじめることによって、子の親（子守にとっては雇主）や、子の近親者に対して、復讐した気分になっている。子をいじめている頃をみると、子の親や近親者への「にくさ」をあらわしているよう

にもみえるけれども、にくいのは、”転べこるべ……死ねばよい”と言ひ捨てているその対象である子どもであるのである。このように、子守娘が真の抑圧者を見誤ることについて、松永伍一氏の「子守娘たちは…階級の構造を深く知る力がないから」という指摘は、一面の真理である。

しかし、子守娘が赤ん坊に対して、にくしみを感じてしまうのは、それだけの理由ではない。にくいという感情自体が、自分に抑圧的にかかってくる真の物に関係なく、また、真の物をみつけようなどという気力とも関係なく、ごくごく手近な対象に対して向けられるという性質をもっているからだと思えるのである。つまり、にくいという感情は、まさに目前に在る具体物に対して宿るのであって、目にみえない抽象物にやどることはない。その場合は必ず、その抽象物のシンボルを要求されよう。そうして、そのシンボル（たとえば、子守にとっての雇い主）を取り出してくる過程で、真の物（雇い主が子守に対してひどい処遇をする背景）は、また見えなくなってくるのである。

だから、にくさの対象にされたものは、ある意味でのいけにえである場合が多い。にくさには、もともとこのような性質があるのであり、見当はずれのにくしみをもってしまふのは「知る力がないから」ばかりではない。「知る力」があつても、「にくさ」の

性質上、だれもがそのような誤ちをおかしやすいのであり、それは、男、女を問わず、そしてまた、子守、実母の別なく、生じることである。

2—② かわいい

一方、かわいいと感じる脈絡を子守唄の中から整理してみると、理由なく子どもはかわいいと規定しているような用法と、寝た子に対してかわいいと感じている言い方と、IIで述べた「限りなく可愛い」という叙情的な言い方、それと特定の容姿について、である。

これらの、かわいさを規定している脈絡から言えることは、これらの状況の中には、ある種のゆとりがあるということである。少なくとも抑圧されていない。子どもが寝てくれた後でも子守の体は疲れきっているかもしれない。しかし精神的には自由である。このようなある種のゆとり、それはつまり、現実の生活の生々しい煩事から解放された瞬間に生じるものであるが、そのようなゆとりが、「かわいさ限りなし」というような叙情的な思いをも含めて、「かわいい」という感情をひき出す要因になっているのである。ここで言うある種のゆとりというのは、もちろん、金や暇という物理的条件だけが備わっていることを意味しているのでは

ない。気持ちのびのびとしていられること、絶えずだれかの目を窺うというようなことのないこと、状況のつらさに対する他者からのおもいやりが感じられること、等々、どちらかと言えば、その人の精神の持ち方を規定してくるような、外的条件なのである。

だから、子を泣かして雇い主から叱られることに絶えずおびえなければならなかったり、遊びたいさかりの幼な子が、肩に重荷をしょって遊べなかったり、という抑圧的状况の中では、子守娘にとつての余裕の要因は奪われてしまい、「なんで可愛がる人の子が」というような、他人の感じる子への可愛さを否定したくなる感情がうまれてるのである。つまり、子どもに対して、「なんで可愛がる」という思いを持つのは、その人自身がひねくれているからでも、いじわるだからでもなく、かわいいという感情をひきおこす要因を奪われている由なのである。

さて次に、このようなある種の余裕を持ちえる、人と人との関係性について考えてみる。このような関係性は、多くは自分より弱い対象との間に生じる。弱い対象との関係においては精神的に畏縮する必要のないことが大きな原因であろう。だから、自分が状況に行き詰まっていればいる程、また、抑圧されていればいる程、自分より弱いもの、かわいく思えるものを、さがし求めます

る。かわいいという感情のこのような側面に関して、なだいなだは、大名が家臣に向かって「カワイイやつじゃ」と言うことは出来るが、家臣が大名に「おカワイラシイ殿様」と言うことはないという例から、カワイイは愛情の一方的な流れによって支えられていると同時に、それはカワイイと言われるものとカワイイと言うものとの間の差別を、そして差別的な秩序を作ることにもなっている」と指摘している。

このように、かわいいが表出されるには、ある種の余裕が必要であり、人との関係の中でその余裕を最も簡単に作り出しうるのは、差別的な関係の中においてであることを見てきた。「かわいい」と感じる時、感じている方の人間は、その対象より優位なところにいることが多い。対象を、どうしても出来る位置にいるのである。逆に言えば、このような状況がない時、かわいいとは思えないのである。

かわいいとにくいとは、ごく手近な具体的な対象との関係において生じるという意味で、同じ人間関係を基盤とした相対立する感情であり、「かわいい」と「にくい」は容易に転換しうる感情である。そして、子どもに対するかわいさにくさに変わった時、「かわいい」と感じえた時の優位な位置ゆえに、「にくい」が即行動、つまりいじめとして表わされやすい。かわいさにくさのこ

のような機構ゆえに、かわいいとにくいとは、同じ対象に対して生じえるのであり、状況によって、その出現が決定されていると考えられる。

2—③ 生物学的要因について

しかし基本的には、前にも書いたように、子どもというものは、万人に対して、「かわいい」という感情をおこさせうる可能性をもっている。そのことは、生物学的に組み込まれていると言え変えでもよいのかもしれない。Eibl-Eibesfeldt でなくても、昔から民衆の間では、可愛い目鼻だちについていろいろなことばが言い伝えられており、この子守唄の研究の中でも、容姿というのがかわいさを感じる一要素であることを見てきた。「目細鼻高桜いろ」と言わずとも、確かに子どもの顔は、おとなの顔とどこか違って、かわいいのである。

この生物学的要因ゆえに、弱者と強者という宿命的図式を内在しているジェネレーション間でさえ、その共存が可能になっているのだと思われる。つまり、おとなの保護を得られなければ餓死してしまふ赤ん坊や、おとなには所詮体力的にも負けてしまふ弱者である子どもたちにとって、唯一の武器なのである。2—②かわいさ、のところで、かわいいという感情は、強者と弱者という

関係を基に成りたちやすいと述べた。そうであれば、おとな子どもにはもともと強者弱者という図式が内在化されているのだから、おとなが子どもを養育していくための生物学的要因は必要ないであろう。しかし、強者と弱者という関係性の上のみ成り立ったかわいさは、その優位性、差別性ゆえに、わずかの条件で容易に、にくさにも転化してしまうし、ひいては、いじめという行動をも引きおこしてしまうのである。

子守唄の中には、にくいとうたっている唄も含めて、ずいぶん多くの、子守娘の子供に対する残酷な仕打ちがうたわれている。

“つらのにくい子をまな板にのせて 青菜切るようにザクザクとよホホ”⁸というところが、現実のことであるわけでは決してないのだが、それほど、にくさは嵩じるかもしれないということであろう。つまり、差別的な関係性を基盤にしたかわいさは、弱者にとっては、いつ拷問に変わるかもしれない、油断できない感情である。だから、生物学的要因は、一面では差別的関係性を基盤としたかわいさと同じように、強者の弱者に対する care をひきおこすものであるが、それが他の感情に転化することはないという点で、関係性によってひきおこされたものとは明らかに違う、本質的な特質を持っているのである。ところが私たちの社会での子に對するかわいさは、もっぱら、差別的関係性を基盤としたところ

で成っている。おとなしく「寝る子は可愛い」のである。

そうして、生物学的要因が作動するのは、憎さを処理するためになってしまっている。起きて泣いていた子が眠った時、その寝顔がたまらなくかわいく感じられ、泣いていた時のにくさが軽減されるのである。また、子を憎む時は、「面」憎いのであって、子どもの全人格に対してではない。

つまり、私たちの社会の中では、生物学的な behavior が人為的な関係性にとってかわられてしまっている。そのため、生物学的要因は、関係性の中で生じた状況の不備を補う形でしか作動しないのである。少しぐらいのにくさは、容姿のかわいさでカバーできるといふ、補強の役目をおわせられてしまっているのである。

そうして、この生物学的要因では補いきれない程、状況要因が悪くなった時、「俵に入れて 土佐の清水へおく」という事象が、現実におこるのである。

最後に

「かわいさ限りなし」といった思いを、実母に特有なものであるかのようにみなす文化の中に私たちはいる、ことをIでみてきた。そして、世話をしている子に對する思いには、本当の母とそ

うでない女との間に、それほど普遍的な違いはないのではないか、という疑問を述べてきた。実母の子に対する思いや態度に、特殊性を付与してくるのが、文化の問題であることは、文化人類学の研究が指摘している。たとえば、ヘヤー・インディアンについての原ひろ子氏の研究によれば、『嬰兒は、その子を生んだ母親が育てなければならぬ』という大前提が、この社会には存在しない。』のである。そして、「子供を預っている大人は、その子を自分の子と差別せずに、実の親子きょうだいのようにとりあつかい、「いったん貰われた『養子』もいつまた他の人のもとへ預けられるのか、親のもとへ返されるのかは分らないという状態である。」

このような文化人類学の研究は、「女性とは妊娠中と出産後とは、子供に対する感情は、黒と白ほど違っているのである。」¹¹というきめつけに反証を与えるものである。千田夏光氏のこの言は、「未婚の母」でも産めば子がかわいくなって、ホイホイ子殺しをするわけではない、という。いわば女性を弁護した発言なのである。しかし、黒と白ほど違ってくる理由、違わせられていく状況に対する取りくみがなされていないために、女性へのきめつけの言となってしまうている。わたしたちの社会は、女がこのように変わることを期待してもいるし、女たちはその期待とおのれの

おかれた位置ゆえに変わらざるをえなくさせられているのである。

文化によって女性に与えられたレッテルを剝がし、本来の人間のあり様をさぐるために、何げない素朴な感情が生起しえる状況や条件についての検討が今後ともなされねばならないと考える。

(お茶の水女子大学)

註

- 1 石川松太郎・直江広治編 一九七七『日本子どもの歴史』第三卷
- 2 仲井幸二郎 一九七七『民謡の女』 実業之日本社
- 3 白田甚五郎 一九七八『子守唄のふる里をたずねて』 桜楓社
- 4 吾郷寅之進・真鍋昌弘 一九七七『わらべうた』 桜楓社
- 5 金田一春彦 一九七八『童謡・唱歌の世界』 主婦の友社
- 6 北原白秋編 一九四七『日本伝承童謡集成第一巻子守唄篇』 三省堂
- 7 アイブル・アイベスフェルト 日高敏隆・久保和彦訳 一九七四『愛と憎しみ』 みすず書房
- 8 松永伍一 取材・構成・ドキュメントに『ぼんの子守唄』 Victor, SJX-2122~4
- 9 なだいなだ 一九六九『思想八月号』「ある」ことと観」 岩波書店
- 10 原ひろ子 一九七〇『ジュリスト』 性
- 11 「性の文化的位置づけと婚姻」 有斐閣
- 11 千田夏光 一九七五『未婚の母』 双葉社